

アンカーのいないリレー

古川学園中学校

三年 佐藤 幸

しわしわでふにゃふにゃ、触ったら破けそうなほど薄い肌に、僕は虫よけスプレーをかけた。

僕は、施設の庭に出るお年寄りのために、虫よけスプレーをかける係だった。僕にとって初めての老人福祉施設でのボランティア活動である。

車いすで出てくるお年寄り一人ひとりに声をかけながらスプレーをかけた。僕の呼びかけにすぐに反応し、手を出してくれる人もいれば、嬉しそうな顔をしている人、不思議そうな顔をした人、全く無表情な人、表情は様々だが、共通点がある。それはしわくちゃだ。

あるおばあさんにスプレーをかけたとき、おばあさんはうめき声をあげ、僕の手を振り払った。僕はどうしたらよいのか分からなかった。おばあさんはスプレーがかかったしわしわな手を弱々しくふりながら、何かを訴えていた。でも僕には、

「うーうー。」

としか聞こえない。

そばにいた職員の方が、すぐに察して、何か声をかけながらおばあさんの手についたスプレーを丁寧に伸ばし始めた。

するとおばあさんはにっこりと笑い、

「あーあー。」
といった。

僕の仕事はただ声をかけてスプレーをかけるだけではなかったのだ。相手の気持ちになって考えてみれば、手についたスプレーをのばすという、当たり前のことができたはずだ。

でも僕にはできなかった。それは、自分の中に、しわくちゃで小さなお年寄りに対する怖さがあったからだ。意味の分からない言葉を発しながらじっと何かを見つめているくぼんだ目が怖かったのだ。

ふと横を見ると、飲み物を手にしたおばあさんがじっと僕の方を見ていた。僕は勇気を出して声をかけてみた。

「こんにちは。」

おばあさんはただじっと僕を見ていた。ジュースを持つ手が小刻みに震えていた。

「ジュース飲みましたか？ おいしかったですか？」

おばあさんは何もいわずに首を少しだけ傾けた。僕はそっと手を出し、ジュースを持ってみた。ジュースは空っぽだった。

「ジュース空っぽですね。じゃあ僕これ片付けていいですか？」

僕はドキドキしながらジュースを握った。おばあさんは力をふっと抜き、ジュースを僕に渡してくれた。

よく見ると手にジュースがこぼれている。僕はティッシュをだして、おばあさんに

「これで手を拭きますね。」

と声をかけた。おばあさんの手はとても冷たかった。しわの間に入り込むジュースを丁寧にふき取り、手をひざの上にのせた。

おばあさんはじっと僕の目を見ながら、少しだけ口元をゆるめて、

「お・・・。」
といった。

僕にはそれが大きな笑顔の「ありがとう。」に聞こえた。

気持ちを伝える手段は言葉だけではない。自分から心を開いて接すれば、きっと気持ちは通じるのだ。職員の方がすぐにおばあさんの言いたいことが分かったのは、心で会話をしているからなのだ。

花火があがると、おばあさんはしわくちゃの顔にうもれている目を精一杯大きく見開いて空を見上げた。おばあさんの目はまるで子どものようにキラキラしていた。おばあさんはきつと七十年前の戦争を経験しているに違いない。僕と同じくらいの年齢だっただろうな。怖かっただろうな。そんなことを考えているうちに、今のこの平和な暮らしはおばあさんたちによって築かれたものだという事に気が付きハッとした。しわの一本一本に刻み込まれたさまざまな思いの上に、この平和が成り立っているのだと知った時、僕はおばあさんから「平和」と言う名のバトンを受け取ったような気持ちになった。そしていつの間にかしわくちゃの怖さは消えていた。

僕は学校の勉強だけでなく、このような活動にこれからも積極的に参加して、未来の介護や医療、そして「平和」について学びを深めていきたい。

僕にはおばあさんから受け取ったバトンを大切に守り、次の世代に渡していく責任がある。そして僕たちがしわくちゃになった時も平和であるように、次の世代にも、その次の世代にもバトンを渡していつてほしい。平和を願うリレーにアンカーはいらないのだから。